『生きてる意味』

Sorairo 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『生きてる意味』

【Ｎコード】
Ｎ０９６７Ｇ

【作者名】
Ｓｏｒａｉｒｏ　光

【あらすじ】
正反対の二人が持つ共通点があった。生きてる意味って何だろう？存在する理由って？そんな誰でも抱える問題を題に二人が少しずつ答えを出していく。

第1話：生きてる意味　由理奈

本を読んで特に人とも話さない。
その場をうろつくわけでもなければ、ただ静かにそして、話の話題に困ったとき笑いものにされるだけの私。
周りからはクールな馬鹿と呼ばれてるけど。
学校の勉強がなんなの？
何よりも、クールなんていわれてるけど、そんなことはない。
確かにグループはいやだし、一人でいることがいやだと思ったこともない。
でも、無理やり他人に合わせるグループに、私のような特殊な考え方のやつは入っていけないだけ。
［ずっと一人はいや。でも、グループよりはずっとマシ。］
周りで響く音は私をさらに孤立させていく。
私が本を読むのは何より、現実を見ないため。
現実は見ること自体めんどくさい。
受け止めなければいけないことが多すぎる。
時に白い目を向けられ、あざ笑われ、「嫌い」その一言で何もかもが進んでいく世界。
あそこのグループも、

本当は笑ってないのに、苦しそうに笑ってる。

見てると痛々しくて、もがいてるみたい。
いつもほら。
仲良しグループも、上辺だけ。
どうして人は群がるんだろう？
そんなに一人は怖いのか？
馬鹿にされることが怖いの？

そんなのが怖くて人間なんかやってられるか。
どうして先生まで生徒の中で苦しそうに笑うわけ？
どうして生徒の言いなりになっちゃうことが多いの？
みみっちい計算をして、生徒に好かれる先生を［作る］
そーゆーの見てると、無性に悲しくなる。
何してんだろうって思ってしまう。
今はもう。
早く大人になりたいなんて思わなくなった。
だって、小学生のころは大人って囲われた世界が子供って囲われた世界より、ずっと広くて自由に見えた。
けど、自分を作るなんて何のために自分ってあるの？って思ってしまう。
それに。
［不自由のほうが自由だ。］
その言葉を。
意味を。
知ってしまったから。
確かに親や大人に縛られてるまだまだガキの私たちさ。
たまに自分は大人だって言い張るやついるけど。
けど、親がいるから。
何もしないでも生きてるんだ。
学校から帰ると自分の部屋にドカっと座る。
ヒーターで足を暖めながら、片手に芋ケンピを。
もう片手に小説を持つ姿は私の周りで言われる［孤独を愛す］や［クール］には程遠く、むしろ、電車の中で大足を広げて新聞を読むオヤジに近いだろう。
今日もいつもと同じだ。
いつもなんて本当はないはずなのに、人間は同じようなことを繰り返す。
こそこそ言っては笑う。

面白ければ何を言ってもいいの？
本人が気づいてなかったら、何をしてもいいの？
本人が無関心そうだったら、その人の存在自体否定していいの？
死相が出てるといわれた目。
あんたらに何がわかる？
私の何がわかる？
この世界は歴史というものを持ちながらにして。
同じようなことを毎日と称して繰り返す。
壊れては再生し、それを繰り返していく。
まるで砂時計のように。
何度も。
何度も。
この繰り返される世界で、頭もいつもを繰り返す。
生きてる意味って何なの？
生きてることに何の意味があるの？
生きてて失うものは多すぎるくらい多いのに。
生きてて得るものって何？
「くっらー」
今日も笑い声が飛び交う。
けど、どーでもいい。
上辺だけで、へらへら笑って誰かのご機嫌とるより一人のほうが気楽だから。
「生きてる意味ってわかんなくない？」
何気なく発された言葉に、私は耳を傾けていた。
「そんなの、どーでもよくね？」
「そーだな。今が楽しけりゃそれでいいか。」
なんとも腑抜けな答えだこと。
まるで食べ物のふが、水につかってべろんべろんになってしまったかのような。
私は教室を出た。

向かう先なんてたいていここ。
部活活動時が書かれている黒板の前。
この廊下の大きな窓からは青い空がのぞいている。
長方形に切り取られた外の青。
ここから見える景色は、空のパズルの1ピースに過ぎない。
「おー晴れてるねー。」
振り向くと、さっき「生きてる意味ってわかんなくない？」といった不良がいた。
えーっと、誰だっけ。君。
とりあえず無視して通り過ぎようとする。
「梨本（なしもと）さんにはわかる？」
呼ばれた自分の名に振り返る。
「生きてる意味。」
わかるわけないじゃないか。
だってそんなもの、元から存在しないのだから。
そう。
私は存在しないものを探してる。
「わかんねーよな。意味も。空の青さも全部。」
黙ってる私に話を続ける不良。
「あなたたちに分かんないよ。一生。今が楽しけりゃそれでいいんでしょう？」
考えにする前に口からこぼれた言葉。
しまったと思って顔をそらす。
まるで床をにらみ付けるような形になってしまった。
「かったいなー梨本さん。」
あんたに私の何がわかるんだ。
「けど、誰にもわかんねーんだろうな。生きてる意味なんて。生きてる限り。さ。」
なんだ。
水に溶けたふじゃないちゃんとした答え。

持ってるんじゃないか。
じっと不良を見る。
金髪のくせに。
なーんて。
不良はクスッと笑って「惚れた？」なんて聞いてくる。
じょーだんじゃない。
けんとー違いもいいとこだ。
すると私は鼻で笑っていた。
「私に惚れられてうれしいやつがどこにいるの？」
どーやら私は思ってることとは別のことを口にしてしまうらしい。
「いるんじゃない？種食う虫も好き好き。」
不良もいろいろ考えるんだな……。
「君がうらやましいよ。馬鹿やって騒いでりゃそれでいいんでしょう？」
また考えとは違うことを口にしていた。
小学生からの悲しい癖か。
はたまた自分と向き合うより、憎まれ口を言ったほうが楽だからなのか。
「そー見える？はは。そんなに言うんだったら梨本さんも明るく……」
「君に私の何がわかるの？」
思っていたことが口からこぼれて出ていた。
おかしい。
いつもならこんな不良なんて相手にしないのに。
何不良相手にこんなにムキになってるんだろう？
「相変わらずだな梨本さん。けどさー、どーしてそーゆーふーにいっつもしかめっ面してるわけ？」
いや。してるつもりはないんだが。
思わず自分の顔に触れる。
「たまには笑えよ？」

君の知らないところで笑ってるからね。
「余計なお世話。」
だからどーしてムキになるんだ。
「……名前、何だっけ？」
勝手に動く口は暴走して止まらない。
「は？」
「君の名前、何だっけ？」
強めに言ってしまった。
「時田（ときた）　充（みつる）……だけど……。」
私、名前聞いてどうするんだ？
「そ。じゃ！！」
相手に何も言わせずに走り去った。
それからしばらく。
時田は毎日私に話しかけてくるようになった。
そのせいで私は今女子の中でいいネタ作りにされている。
たまに視線が痛かったり、馬鹿にされたり。
とにかくいろいろ。
「なしもっちゃん。」
「何、その呼び名。」
「いーじゃん最近なしもっちゃんしかめっ面なくなったよね。」
眉間にしわを寄せる。
私の顔なんか見てたんだ？
「もーいや。君といるの。」
「エーなんで？つーか君ゆうのやめよーよ。俺、時田って。」
「えー？じゃ、じた？」
その瞬間。
その場が一瞬にして凍りついたのかと思った。
時田は。
彼の目は私を軽蔑するような。
外のものとしか見てないようなそんな冷たい目を私に向けていた。

何？
周りからはそう呼ばれてるのに、私は駄目なの？
「なんでその名前。俺、じたって好きじゃないんだよね。」
いつもどうり笑顔で言う。
笑顔なんてきっと嘘だ。
私はなれなれしくしちゃいけないんだ。
なぜか無性にむかついてきて私は口を開いていた。
「へぇー？そうっすか。じた君。」
「なしもっちゃん。俺のこと嫌い？」
嫌いだよ。
だいっ嫌い。
私をこれ以上かき乱さないでよ。
「うん。嫌い。だって君といると私じゃなくなっちゃう。」
「どーゆーこと？」
「君の前にいると私、思ってること全部言っちゃうの。」
どうして？
どうして君は私の中身を。
どろどろした何かを引っ張り出そうとするの？
どうして私なの？
どうして私は彼のまえだと秘密ができないの？
何でだまってることができないの？
「そっか。なしもっちゃん俺のこと好きなんだ？」
一瞬胸がうずいたような気がしたけど。
それもすぐ消し飛んだ。
あきれて怒る気にもなれないような力抜けした声が発される。
「はぁ～？」
「ほら。否定しない。」
「そうね？否定する気にもなれない。どうしてあなたは私をそうかき乱すのかしら？どうして私に話しかけるのかしら？どうして私なのかしら？もう……。もう、私に近づかないで！」

はっとした。
なんて暴言を私は吐いてしまったんだろう。
「……いいよ。わかったよ。」
そう言ってその日からもうずっと話してない。
もう。
目すら合わない。
なんか。
寂しいような。
ううん。
あんな奴なんかいなくてせいせいする。
それでもモヤモヤするこの気持ちは何なんだろう？

――――…。

もう。2ヶ月経った。
ねぇ？時田。
あなたに聞いてほしいことがあるの。
わかったの。
あなたと私が探してた問題の答えが。
一時的なものかもしれないけど。
別にあなたにいちいち言う必要もないんだけど。
私の足は止まらない。
何を求めてどこに向かってるのかさえよくわからないけど。
ただその背中に私は叫んでいた。

「時田充！」

その背中がゆっくり動いて。
帰ってきた声がたった2ヶ月しか経ってないのにすごく懐かしく感じた。
「なしもっちゃん……？」
「ねぇ！私、わかっちゃったの！君が探してる問題の答え！」
「え？」
「ほら、人は何故生きるのか。生きてる意味！」
「へぇ？」
「みんなそれぞれ違うって言うじゃん？けど、そーゆー違う考えの人たちと出会うことで人は
それを喜びに変えるんだって。私と君はまったく縁のない人間だっておもってたよ。けど、私たちは出会った。そしてお互いの考えに触れることでそれを吸収して喜びや何かに変えて生きるんだって。
そのために人は生きるんだって！そう思ったの。君がいたから。そう思えたの！」
「わかったよ。由理奈（ゆりな）」
呼ばれた名に驚いて時田の顔を見つめた。
「何で……私の下の名前まで……。」
「どーせ君のことだ。俺のこと友達か親友ぐらいに思ってるんだろ？それだったら、ダチの名前ぐらいおぼえんだろ。」
「そっか。はぁ～。なんってことをしたんだ。私は……。廊下で叫ぶなんて……。」
思っていたことをすべて口にしたせいか。
それとも、時田が近くにいる安心感からか、体の力が抜けた。
彼（ときた）のことはまだまだわかんない。
けど、彼の一言は私を安心させてくれる。
多分、生きてる意味は生きてる限りずっと探していかなきゃならないんだろうと思う。
そうすると、今度は長く生きる意味って何？って思ってしまうけど、

生きてる意味の答えはきっと1つじゃないんだろうと思う。
そう。終わるにはまだ早いんだ。
だからこれからは、時田と一緒に答えを探してけるといいな。
そう思うと顔が赤くなった。

・・・Nasimoto—Yurina side End・・・

第2話：生きてる意味　充

世間なんて腐ってやがる。
真面目といわれる奴ほど俺が嫌うものはない。
悪いことは真っ先に俺が疑われた。
窓ガラスが割れたときも。
誰かの金がなくなったときも。
真っ先に俺が疑われ、俺のせいにされてきた。
先生まで真面目を指差して「こいつを見習え。」口ぐちにいった。
じょーだんじゃねぇ。
紙切れ一枚が何なんだよ？
いける高校がねぇ？
あぁ。上等だ。
フリーターやってやるよ！
そんな毎日で、毎日がある意味も。
生きる意味さえわからない。
ムシャクシャして人殴って。
遊びで軽く人いじめたり、物を投げたりした。
真面目君はたいてい先生に好かれる。
そんな中、真面目が一人目に入る。
あいつもそうなんだろう。
だから。
いつもみたいにいじりに入る。
「うっわぁー何あれ！！」
見ただけで目間合いがしそうな字がびっしりでこれっぽちも挿絵がない本をその女子は読んでいた。
「あれさー梨本ってんだけどさー。存在自体“元”から“無い”よな？」＝梨本。もとなし。
「そーそー！！頭悪いし笑わないし。最悪だよなー！」

ふーん？
俺が知ってる真面目とはだいぶ違うみたいだな。
気取らず、笑いものにされても顔色１つ変えない。
腐っちまってるよな。
やっぱ、この世界。
お前も腐っちまってる中にいることに慣れきったんだろう？
外見だけでものを言われるこの世界によぉ？
何故かはわからない。
この日から俺は梨本を気にかけるようになっていった。
外見だけで物事を。
すべてを判断されるこの世界に何のために俺らは生きるんだろう？
「生きてる意味ってわかんなくない？」
不意に出た言葉に梨本が少し反応する。
お前は生きてる意味がわかるか？梨本。
「そんなの、どーでもよくね？」
「そーだな。今が楽しけりゃそれでいいか。」
自分が出した質問にあっさりと答えが出ていた。
すると梨本が立ち上がった。
自分でも今の答えが本心じゃないことぐらいわかってる。
そして俺は何故か梨本の後を追っていた。
梨本が見つめる先には空があった。
何かに取り付かれているかのように青いその空は。
幸せと同時にいつも不幸せを描かせる。
幸せの青い鳥だったり。
悲しみの青だったり。
形を変えて何度も何度も生まれ消えていく。
今、梨本が見てる青は、どっちの“青”なんだ？
「おー晴れてるねー。」
梨本が振り向く。
俺の姿を見ると、無言で通り過ぎようとした。

「梨本さんにはわかる？」
彼女は足を止め、ゆっくり振り返る。
「何を？」といわんばかりだ。
どーやったらこんな少しのしぐさでこんなに感情を入れることができるんだろう？
「生きてる意味。」
少しだけ梨本が眉間にしわを寄せる。
困ってるとも、怒ってるとも取れる表情で、なんとなく顔をそらす。
「わかんねーよな。意味も。空の青さも全部。」
すると彼女の口が動く。
「あなたたちにわかんないよ。一生。今が楽しけりゃそれでいいんでしょう？」
そして顔をそらして床をにらみつける。
それは本気で迷惑がっているようにも、俺に当てられた何かのメッセージのようにも見えた。
「かったいなー梨本さん。」
少し怒らせてしまったかもしれない。
話題を変えるか。
「けど、誰にもわかんねーんだろうな。生きてる意味なんて。生きてる限り。さ。」
見つめられることには慣れていない。
睨みつけられることには慣れてるけど、梨本は怒ってもいなければ驚いたようすも無くて今梨本は何を思ってるのか知りたくて。
俺は笑いをとった。
「惚れた？」
確かに梨本は笑った。
でも、鼻で。
「私に惚れられてうれしいやつがどこにいるの？」
いや、別にみんな誰かに好かれたらうれしいんじゃん？
「いるんじゃない？種食う虫も好き好き。」

すると梨本は表情を緩め、言い放った。
つまり、苦笑したのだ。
「君がうらやましいよ。馬鹿やって騒いでりゃそれでいいんでしょう？」
そればっかじゃねーよ？
それじゃ、梨本はいつも本気でいきてんのか？
生きてる意味なんてわけわかんねーもん探したりしないのかよ？
「そー見える？はは。そんなに言うんだったら梨本さんも明るく……」
「君に私の何がわかるの？」
わかるよ。
腐った世界の中に慣れきって結局はどっかで現実から目をそらすんだ。
俺らと同じだろう？
「相変わらずだな梨本さん。けどさー、どーしてそーゆーふーにいっつもしかめっ面してるわけ？」
顔色ひとつ変えずにどこか一点を見つめたまま梨本は自分の顔に触れる。
「たまには笑えよ？」
「余計なお世話。」
そらそーだわな。
「……名前、何だっけ？」
聞いてはいけないことを聞いてしまったようで驚いた。
「は？」
「君の名前、何だっけ？」
顔や態度はどこも怒ってないのに声だけが起こってるように聞こえる。
「時田（ときた）　充（みつる）……だけど……。」
「そ。じゃ！！」
そう言って俺が言葉を発する前に梨本は走り去って言った。

本を読んでる梨本。
…よし。思い切って邪魔してやるか…。
「梨本さん。」
振り向いた梨本の顔はすごく驚いてて、口が半開きだった。
「本ばっか読んで楽しい？」
「君には分かんないよ。」
そんな即答しなくても。
「何で私なの……？」
「え？何が？」
「何で私に話しかけるの？無視すればいいじゃん。」
「……なに？好きな男子でもいるのかな～？」
冗談を言ったつもりが本気で怒られた。
「んなわけないじゃん！」
「まーまーおこんなって。何部？」
「……美術部。」
「へー。俺バスケ部。」
「聞いてないし……。」
梨本を見ると、本に目を戻してはいるけどうっすらと笑っていた。
「あー！！今、部活やってないだろ。とか思っただろ！！」
「思ってないよ。」
「嘘付け！」
「うん。正直思った……かも。だって、廊下とか校舎内に体育着とか着た金髪いたら目立ちそうだし。」
梨本の口が猫のようにくにゃっと曲がっていた。
笑うとなかなかかわいい。……かもしれない。
「もったいないなー。」
その声に梨本はすぐしかめっ面に戻ってしまう。
そのまま梨本を観察し続ける。
「何？あんまジロジロ見ないでくれない？」
「気にしない。気にしない。」

「気になるから！」
そんな日が何日か続いたある日。
「ねぇ。時間なんてさ、いつも同じようなこと繰り返してるって思うときない？」
「ん？」
「人を見下す奴ほど外見だけしか見てなくて、人間として低レベルだって思うこと……ない？」
あるよ。
めちゃくちゃあるよ。
「ないか。あるわけないよね！」
「あるよ。あるから何かに反発して生きるんだ。」
「そ……かぁ。不良でもそゆーことかんがえるんだぁ？」
「不良不良ゆーな！このくそ真面目！！」
仲良くなってわかった。
梨本も生きてる意味を探してる。
俺らとは違うやり方で。
梨本は誰も自分に触れさせないことで自分の考えから自分を守って。
それでこの世の中に反発してるんだ。
けど、鎧を身にまとうなんて見てて痛々しすぎる。
ほんとは一人じゃ何にもできないくせに。
一人じゃ辛いくせに。
だから本に逃げたんだ。
違うか？
って、何やってんだ。
梨本ばっか見てるじゃねーか。
梨本はほっとこ。
そう。
ほっとくんだ。

――――…。

「ねぇ？」
その一言で俺は振り向いてしまった。
呼ばれたのが俺じゃないかもしれないのに。
「生きてる意味。君ならわかる？」
「は？」
「君があの時私に聞いた言葉だよ。あの時の私も君みたいな顔してたのかな？困ってるような。切羽詰ってそうな。」
「はぁ？よくわかんねーんだけど。」
「いや。落ち込んでるようにも見えたから。一人の時間。邪魔しちゃってごめんね？それと、いつもみたいに元気にしてなよ？」
梨本から初めてごめんなんて聞いた。
それに俺のことなんか見てたわけ？
放課後で、荷物をまとめて帰ろうとする梨本を俺は呼び止めた。
「待てよ。」
「ん？」
「たまにはハメはずしたら？」
「ゲーセンはやだよ？頭痛くなるもん。」
「じゃーなんならいいのさ？」
「ん～話すぐらい？」
思わず噴出した。
「何それ！」
すると梨本はふっと笑った。
「笑った。」
「笑っちゃわるい？」
「言ってねーよそんなこと。」
いつの間にか教室には二人っきりで。
あっちこっちから部活の音が響く。

これってカップルだったらサイコーなんじゃ？
ま。俺にはかんけーねーけど。
「なんだろーね？君と私って似ても似つかないのにこうして出会って。私を馬鹿にしてた奴とこんなふうになるなんて思っても無かったよ。」
「馬鹿にって……悪かったよ。真面目って嫌いなんだよ。くるくる目上の人のことばっかきにしてなくちゃいけないみたいで。」
「自分を偽る生きかたってやつ？」
「そう！それ！」
「はぁ～。なんか駄目だ。私。君といるとおかしくなっちゃう。」
「ひど……。」
「なんだろーね？安心しちゃうのかな？」
はい？
「俺のこと男だと思ってないんじゃね？」
返事は来なかった。
梨本は何かを考え込んでいた。
鋭い目で睨みつけてる先は、“空”
そこにはうろこ雲がたくさん並ぶ青めの空があった。
ガチャガチャ。
「下校してくださーい。」
「はーい。」
2人で上辺だけの返事をして教室を出る。
「サボったんだね。」
「そっちもだろ。」
サボったとは、部活のこと。
仲間も連れてない。
このまま帰りたくない。
正直帰っても詰まらん。
「あーどーすっかな。まだ時間ありあり。」
「それはこっちも同じ。無断欠席だよ？」

「どっかにバックレよ……っても、あれか。ゲーセンやなんだよな。しゃーねー親の説教かよ」
「あ。じゃ、うち来る？」
「は？」
そう言ったとたん梨本は真っ赤になって否定した。
「や！うそ！！今のなし！！なかったことにして！！」
「親は？」
「遅くなるって。」
「ふーん？じゃ、行っていい？」
「え。でも。」
「何もしやしねーよ。」
「そうだよね。私が相手じゃね！！」
「だから……。」
『だからどーしてそうマイナスにとるわけ？』そう言いかけて言葉を失った。
梨本の顔を見てしまったから。
梨本の声は笑ってるのに。
顔は苦しそうだった。
「別に梨本だからってわけじゃねーよ。ただ……嫌われたくないだけ。」
「誰が？何を？」
何ってこと聞くんだ？この女。
「梨本さんが俺を！！」
「大丈夫！そのことはもう結果が出てるから。」
「あっそ。」
そのあと、いろんなことがあった。
とにかく、距離はだいぶ近づいたと思う。
「なしもっちゃん。」
「何、その呼び名。」
「いーじゃん最近なしもっちゃんしかめっ面なくなったよね。」

眉間にしわを寄せる梨本。
「もーいや。君といるの。」
「エーなんで？つーか君ゆうのやめよーよ。俺、時田って。」
「えー？じゃ、じた？」
どーゆーことだよ？何であの忌まわしい過去の名前を。
梨本が知ってるんだ？
何で、いまさらまた・・・・・・・。
あのころの名が蘇るんだ・・・・・・？
「何でその名前・・・・・・。俺、じたって好きじゃないんだよね。」
「へぇー？そうっすか。じた君。」
「なしもっちゃん。俺のこと嫌い？」
「うん。嫌い。だって君といると私じゃなくなっちゃう。」
「どーゆーこと？」
「君の前にいると私、思ってること全部言っちゃうの。」
それは、嫌い＝好きってことっすか？
「そっか。なしもっちゃん俺のこと好きなんだ？」
「はぁ～？」
「ほら。否定しない。」
「そうね？否定する気にもなれない。どうしてあなたは私をそうかき乱すのかしら？どうして私に話しかけるのかしら？どうして私なのかしら？もう……。もう、私に近づかないで！」
「……いいよ。わかったよ。」
きょひられたのだ。俺は。
結局、梨本にとっちゃ、迷惑以外の何ものでもなかったんだろう。
話しかけない日々が続く。
「時田。怖い顔すんなよ。梨本移ったんじゃね？」
「移ってねーよ。」
梨本はゆーれーかっつーの。
「そういや、梨本も最近しかめっ面だよな。」

梨本が・・・・・・？
目の端に捕らえた梨本は本を手に、何かを必死でこらえてるような苦しそうな顔をしていた。
それは今までに見たことのない、今までよりずっとずっと怖い顔だった。
「にしても、この前の女？ふっちゃうにはもったいねーよな。」
うるせー・・・・・・な？
「時田って、梨本がすきなんだろ？」
「っ。はぁぁぁぁぁあ！！？？」
んなわけねぇ。
んなわけ・・・・・・。
俺はふらふらと廊下に出る。
何かを求めていた。
梨本。やっぱわかんねー。
生きてる意味ってあんのかよ？
いつの間にか、梨本に初めて話しかけたところに来ていた。
外はどんよりと曇っていて、何故か苦しくなった。
俺は2つのものを失った。
ひとつは梨本のそば。
もうひとつはここ。
きっと、生きてる意味なんてねーんだ。
存在理由なんて、ねーんだ。
探したって、見つかるわけねーんだ。
苦しくなって俺はその場を立ち去った。
灰色のその空にも、俺の出した答えにも。
日の光が差し込むことはなかった。

それから、また何日が過ぎたんだろう。
あいつでもなけりゃ、こいつでもない。

俺は何を探してる？
何を求めてる？
わからないまま校舎内をすでに2週していた。
それでも俺はさらにスピードを上げ、歩き続ける。

「時田充！」

懐かしい声が響いたってきた。
いつもより、ずっと大きな声は、振り返ると息を荒くして肩を上下させていた。
きっと走ってきたんだろう。
何だ？
何を安心してるんだ？俺は。
「なしもっちゃん……？」
「ねぇ！私、わかっちゃったの！君が探してる問題の答え！」
「え？」
「ほら、人は何故生きるのか。生きてる意味！」
あぁ、とっくにあきらめた問題の答え・・・・・・ね。
梨本はあきらめてなかったんだ？
「へぇ？」
「みんなそれぞれ違うって言うじゃん？けど、そーゆー違う考えの人たちと出会うことで人は
それを喜びに変えるんだって。私と君はまったく縁のない人間だっておもってたよ。けど、私たちは出会った。そしてお互いの考えに触れることでそれを吸収して喜びや何かに変えて生きるんだって。
そのために人は生きるんだって！そう思ったの。君がいたから。そう思えたの！」
その答えは俺が出したどの答えよりも率直で、正論で、なにより優

しかった。
「わかったよ。由理奈(ゆりな)」
ただ、うれしかった。
どうしてかはわからないけど。
答えを見つけられたことも。
梨本がそばにいてくれることも。
「何で……私の下の名前まで……。」
なんだろーな・・・・・・。
「どーせ君のことだ。俺のこと友達か親友ぐらいに思ってるんだろ？それだったら、ダチの名前ぐらいおぼえんだろ。」
この気持ちは・・・・・・。
「そっか。はぁ～。なんってことをしたんだ。私は……。廊下で叫ぶなんて……。」
真っ赤になったその横顔に触れるにはまだまだ距離があるのだろうと思う。
でも、何かで迷うことは少なくなったんじゃないかと思う。
それもこれも、梨本のおかげだ。
なんだか急に恥ずかしくなって、俺は梨本から顔をそらした。

・・・Ｔｏｋｉｔａ－Ｍｉｔｕｒｕ ｓｉｄｅ Ｅｎｄ・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0967g/

『生きてる意味』

2010年10月10日07時11分発行